

メッセージアウトライン サムエル記第一3:1～21

「サムエルの召命」

[1]「さて、少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった」

ユダヤ人歴史家ヨセフスの「ユダヤ古代史」によると、この時サムエルは13歳であったと記されている。この時代は士師記の終わり頃と思われる。士師すなわち「さばきづかさ」の治めたこの期間は約三百年間続き(諸説あり)、「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた」(士師記21:25他)時代であった。イスラエルにおいては、目の前の豊かさや物質的なことのみを追い求め、主なる神を礼拝することも形骸化し、主のみことばに従い、主を恐れ、主に従うという宗教教育がおろそかになっていた。このような時代においては「主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった」というのも当然かもしれない。

[2]「その日、エリは自分のところで寝ていた。彼の眼はかすんできて、見えなくなっていた」

老人特有の白内障か緑内障か。(詳しいことは不明)→創世記27:1、48:10

[3]「神のともしびが消される前であり、サムエルは神の箱が置かれている主の神殿で寝ていた」

カナンの地に定住したイスラエル人はシナイの荒野を移動しながら礼拝した幕屋形式の神殿ではなく、このサムエル記の記事から見ると、もっと恒久的な神の宮を設営していたと考えられる。それは木材や石材を用いて造られていたのであろう。もちろん、聖所、至聖所などの配置や基本的な構造は同じであったであろう。

「神のともしび」…聖所に置かれた七つの枝を持つ金の燭台。このともしびが消される前とは、まだ夜明け前であったということである。「神の箱(十戒の石板、芽を出したアロンの杖、マナを入れた金のつぼが入れられていた→ヘブル9:4)」は神の臨在を象徴するものであり、至聖所に置かれていた。サムエルはもっと手前に設けられていたと思われる控室で夜番をしながら寝ていたのであろう。

[4-7]「主はサムエルを呼ばれた。彼は、『はい、ここにおります』と言って、エリのところに走って行き、『はい、ここにおります。お呼びになりましたので』と言った。エリは『呼んでいない。帰って、寝なさい』と言った。それでサムエルは戻って寝た」(4-5)

そしてもう一度同じことが繰り返される。(6)

「サムエルは、まだ主を知らなかった。まだ主のことばは彼に示されていなかった」

(7) これは個人的、直接的な神の語りかけを体験していなかったということである

う。

[8-9]「主は三度目にサムエルを呼ばれた。彼は起きて、エリのところに行き、『はい、ここにおります。お呼びになりましたので』と言った。エリは、主が少年を呼んでおられるということを悟った。それで、エリはサムエルに言った。『行って、寝なさい。主がおまえを呼ばれたら、『主よ、お話ください。しもべは聞いております』と言いなさい。』サムエルは行って、自分のところで寝た」

このことが三度も繰り返されたのでエリは、これはサムエルが寝ぼけているのではなく、主が彼を呼んでおられるのだということを悟った。エリ自身は老年になっていたが、このような経験をしていなかったのであろう。

[10]「主が来て、そばに立ち、これまでと同じように、『サムエル、サムエル』と呼ばれた。サムエルは『お話ください。しもべは聞いております』と言った」

今度は主の御声だけではなく、主ご自身が彼のそばに立ち、語りかけられた。これは幻の中にご自身の姿を示されたということであろう。そしてエリが授けたことばのとおり、サムエルは主に答えた。

[11-14]「主はサムエルに言われた。『見よ、わたしはイスラエルに一つのことをしようとしている。だれでもそれを聞く者は、両耳が鳴る。その日わたしは、エリの家について語ったことすべてを、初めから終わりまでエリに実行する。わたしは、彼の家を永遠にさばくと彼に告げる。それは息子たちが自らにのろいを招くようなことをしているのを知りながら、思いとどまらせなかった咎のためだ。だから、わたしはエリの家について誓う。エリの家のだ咎は、いけにえによっても、穀物のささげ物によっても、永遠に赦されることはない。』」

これはエリの家へのさばきの宣告である。このことは2:27-36において一人の神の人が来て、彼に詳しく告げたことと内容的には同じである。すなわち、主はエリに告げたことをすべて実行する。エリの家のだ咎はいけにえによっても、穀物のささげ物によっても永遠にゆるされることはない。

この表現は彼らの罪が非常に重いことを強調したものである。「両耳が鳴る」とは、わざわざ耳にして非常に驚き、愕然とする様子を示すことば。

[15]「サムエルは朝まで寝て、それから主の家の扉を開けた。サムエルは、この黙示のことをエリに知らせるのを恐れた」

主の家の扉を開けることもサムエルの仕事のひとつであった。サムエルは主のことばをエリに語るのを恐れた。「黙示」とは神の啓示のことで11-14節を指す。

[16-17]「エリはサムエルを呼んで言った。『わが子サムエルよ。』サムエルは『はい、ここにおります』と言った。エリは言った。『主がおまえに語られたことばは、何だったのか。私に隠さないでくれ。もし、主がおまえに語られたことばの一つでも私に隠すなら、神がおまえを幾重にも罰せられるように。』」

「わが子」とは6節でも言われているが、実の子ではないが、サムエルに特別な愛を

持っていたことを示す表現。

エリはサムエルに主が昨夜語られたことの内容を問いただす。すでにエリは2章で神の人が自分のところに来て語ったさばきを聞いていたので、主がサムエルに語られたこともそれと関係することだと感じていたのかもしれない。「神がおまえを幾重にも罰せられるように」…誓いをするときの慣用句。

[18]「サムエルは、すべてのことをエリに知らせて、何も隠さなかった。エリは言った。『その方は主だ。主が御目にかなうことをなさるように。』」

サムエルのことばを聞いて即座にエリは「その方は主だ」と断定した。2章の神の人の告げたことばと、サムエルが告げた主のことばから、主が彼の家を確かにさばかれることを確信して、「主が御目にかなうことをなさるように」と言わざるをえなかった。彼は長年主に仕えて来た結果がこのようなさばきとは納得できないものと感じたかもしれないが、子どもたちに対する主のことばを軽んじて生きるような長年の甘やかしと神に仕える祭司としての不忠実さを改めて示されて納得せざるをえず、主のさばきを甘んじて受けなければならないと自覚したのであろう。

[19-20]「サムエルは成長した。主は彼とともにおられ、彼のことばを一つも地に落とすことはなかった。全イスラエルは、ダンからベエル・シェバに至るまで、サムエルが主の預言者として堅く立てられたことを知った」

このサムエルへの主の語りかけは一度限りの出来事ではなく、サムエルのその後の預言者としての活動の始まりであった。サムエルは成長し、ますます主に用いられる器となり、エリの家はますます主のさばきへと近づいていく。「ダン」…ヘルモン山麓にあるイスラエル最北端の町。「ベエル・シェバ」…ヘブロン南西約40キロメートルにあったイスラエル最南端の町。それで「ダンからベエル・シェバまで」とはイスラエルの北から南まで、すなわちイスラエル全土を表すことばであった。

[21]「主は再びシロで現れた。主はシロで主のことばによって、サムエルにご自分を現わされたのである」

「シロ」は神殿のある地で、祭司エリやサムエルがそこで主に仕えており、エリコから北西に約30キロメートルのエフライム部族の領土内にあった。

「再び」とは直訳「重ねた、付け加えた」で二度目だけに限らず、現れ続けられたとも理解できる。

主はシロの神殿でご自分のみことばによってサムエルにご自身を現わし続けられ、彼の預言者としての活動を確立させられるのである。

サムエルは自分で思いついて預言者になろうとしたのではない。そんな恐れ多いことを彼は少しも考えてはいなかったであろう。しかしそのサムエルに主は三度も呼びかけられた。主はエリの息子たちへの甘やかしや息子たちの罪深い行いの放置、みことばに不忠実な宗教的怠慢の道を行くエリの家を退け、母ハンナの切実な祈りによって与えられ、幼少より主に献げられ、主のもとで育てられて来たサムエルを

イスラエルの預言者として召されたのである。

四度目に主が呼びかけられた時、彼はエリの助言によって「主よ、お話してください。しもべは聞いております」と答えた。彼はまだ主を知らなかったのであるが、主の方から彼に語りかけてくださった。サムエルに主のことばを聞く用意ができた時に、主は続いてエリの家のおさばきについて語られた。

「サムエルは、この黙示のことをエリに知らせるのを恐れた」自分の養い親ともいべきエリに衝撃的なおさばきの内容を伝えるのは、彼に仕える身としては恐ろしいことであつたであろう。エリの怒りを買うかもしれない。追い出されるかもしれない。さまざまな躊躇、逡巡があつたことであろう。しかし、エリの強いうながしにより、ついに彼はすべてのことをエリに知らせて、何も隠さなかつた。

サムエルはこれからイスラエルの預言者として活動して行く時に、主のことばを語ろうとする時の恐れ克服と、すべてのことを知らせて何も隠さないという姿勢を持つていかなければならない。

彼に続く預言者たちも、みなこの道を通つた。エリヤ、エリシャ、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、ヨナ等々。

エリのことから教えられることは、彼は自分の子どもたちについては甘やかし、あるいは忙しさにかまけて放任してしまい、その罪が目に残るようになってから注意しても、子どもたちはすでに聞く耳を持たなかつた。これは幼い時から家庭において、主を愛し、主を恐れ、主に従い、みことばを守るといふ宗教教育が十分なされていなかつたからではないか。→箴言22:6、29:21

しかし彼はそのような苦い経験をしてきたがゆえに、サムエルに対しては同じようにはせず、「主よ。お話してください。しもべは聞いております」と言いなさいと教えることができた。またサムエルから主のおさばきの厳しいことばを聞いた時も、反発せず、怒らず、「その方は主だ。主が御目にかなうことをなさるように」と受け入れた。

信仰の年長者である者も、たとえ若者から神のみことばに基づく手厳しい批判や意見を聞かねばならなくなつた時には、それが当たっているならば「その方は主だ」と認めて悔い改める姿勢を持つていふことが大切である。神の前には老いも若きも、親も子もなく、対等に罪人であり、誤りやすい者であるといふことを常に覚えておかなければならない。